

第 14 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 23 日（金）午後 1 時 00 分～午後 4 時 00 分

2 場所 上田情報ライブラリー 5 階 会議室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	宮阪 義彦委員
佐藤 元太郎副委員長	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員
荻原 拓次委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日は年末のお忙しい中、また祝日にもかかわらずお集まりをいただきましてありがとうございます。それでは委員長、よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

本当に年度末のお忙しいところご苦労さまでございます。ただ今から第 14 回高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。それではお手元の次第に沿いまして、進めさせていただきます。初めに資料を用意していただいております。それについて事務局からご説明をお願いします。

5 資料説明

（植松主任教育支援主事）

それではよろしくお願いいたします。まず資料の説明に先立ちまして、他地区の推進委員会の状況につきまして簡単に、ご説明させていただきます。

前回の 12 月 11 日以降、他の地区の状況でございますが、12 月 17 日（土曜日）北信地区第一推進委員会で第 14 回の会を開いております。こちらでは長野南高校と松代高校の統合について、少子化の状況から通学区全体を見渡した上で、統合を前提に考えるということとございまして、第 3 区から通学する生徒も多く、地域の 15 歳人口も多いことから、長野南高校の校舎・校地を、活用したらどうかということも考えられると、というような意見が出されたということでございます。また多部制・単位制の配置の問題につきましては、次回以降継続して検討していくと、いう状況でございます。

続きまして 12 月 18 日（日曜日）でございますが、中信地区第 4 推進委員会で第 14 回の会議を開いております。こちらでは第 12 区の個別の論議 4 回目ということを行いまして、学級数を増やしても将来的には、大北地区で 4 校の維持は困難であるということを確認した上で、具体的な再編案について審議したと、いうこととでございます。委員長提示の 4 つの統合案の中でメリット、デメリットを比較検討等いたしまして、大北地区 4 校の今後

の在り方について、論議をいたしました。最終的に 14 人の委員の意見を集約した結果、大町高校と大町北高校を統合するということが、合意されたということでございます。また第 11 区の個別論議の 2 回目も、行ったということでございまして、大系線沿線および新安曇野市の高校の、今後の専門高校の廃止等を含めた審議を、したということでございます。次回も引き続き審議をしていくと、いうことでございます。以上他地区の推進委員会の状況でございました。

以下高校教育課植松主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

(飯島委員長)

ありがとうございました。それではただ今資料等のご説明がございましたが、これについてご質問、ご意見ありましたら、いただきたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは本日の議事に入りたいと思います。前回、あるいは前々回と、望月高校を多部制・単位制に転換する対案について、ご意見をいただいております。本日はその一定の方向を定めたいと考えております。

前回までいただいたご意見、私のほうから多少集約させていただきますと、佐藤委員からは、対案として出ましたが、それよりも、蓼科高校と統合してより魅力ある学校にしていったらどうかというご意見であります。また和泉委員からは、多部制・単位制について、望月高校ということよりは、なんで県はたたき台として野沢南高校をしたのか、その辺の説明を、もう少しきっちりして欲しいと、いう話が出ていました。また名前の上がっている当事者だけの議論でなくて、もう少し幅広く意見をいただいたらどうかと、いうお話であります。

それから宮阪委員からは、多部制・単位制は進学対応型にという話も出ているが、今回設置するということであるならば、ぜひ交通の利便性を考慮すべきだということでありました。望月への通学でのバスダイヤは可能なのか、その辺のところの問題点も提起されました。また西村委員からは、やはり多部制・単位制というのは利便性が一番である。それについて考えると、望月では難しいのではないかとというご意見がございました。一方中沢委員からは、鉄道はないが発想を変えると、山村留学と望月らしい提案があって、これを受け入れるということでも、いいのではないかとというようなご意見、また市川委員からも、望月の地域性を十分考えての提案は、交通の不便性を乗り越えて通学する子どもも、出てくるのではないかとというようなご意見がありました。

まだそのほかにも、それぞれの委員さんから、賛否両方のご意見がありましたが、その辺の意見を基にしながら、もう一度この多部制・単位制、この第 2 通学区では、設置するという方向では、皆さんの意思統一ができております。それをどこの高校にするかという話から、県のたたき台である野沢南高、それに対する対案として望月高校の案が出てきたわけです。その望月高校の案に関して、これを望月高校の提案どおり受け入れた方がいいのか、あるいは皆さんのご意見を集約して、そうでないという形にする方がいいのか、この辺のところを、もう一度前々回の続きで、議論を深めたいと思っております。よろしくお願ひしたいと思います。

それではご意見をいただきたいと思います。

(小林委員)

前回も、話し合いがされ、いろいろ深まってきましたが、その中で一点落ちているのは、夜間というのですか三部というのですか、その扱いをこの委員会で、どのように意思統一していくのかと、これが一番問題になるのではないかと思います。望月高校第三部ということになりますと、それはちょっと私は考えていないし、そこまでは考えられないということになると、現在ある定時制をそのまま残すのか、残すということは現在の状況で残すのか、こういうことが前回の中にも議論が深まっていない、その一番大きなものではないかと思っています。

私とすれば、県の方針のように部制にして、一部、二部、三部その中に午前、午後、夜間ということで、統一していくということが、よろしいのではないかと思います。そこが深まっていけば、先が見えてくるのではないかと、今日はそういう方向で、進めていただければありがたいなと思っています。

(飯島委員長)

ありがとうございます。前回も小林委員からは、その夜間をどうするのだというご意見は、出ておりました。この辺の提案について、いかがでしょうか。

(原 委員)

ちょっと確かめたいのですが、今の小林委員さんの前回ご発言がございましたが、望月の転換に関わって二部の提案がある。夜間部が現在どの構想にも入っていない。それをどうするかということ。そのことはすなわち現在の、夜間定時制の問題とも、関係するということその両方兼ねての、ご発言でしょうか。確認させてください。

(小林委員)

私は現在の各学校にある定時制、それも改革していくという方向で、考えております。ということは、現在のまま、定時制の子どもは、現在の学校に残すという方向ではないということです。

(原 委員)

その件については、おそらくかなり対立すると思われます。前々から申し上げているように、現在の夜間定時制というのは、生徒の大半が、不登校等の学習歴あるいは生活歴を持っていて、そしてなるべく自宅から近いところということ、これがひとつの基本的な条件になっていると、同じ事何度も何度も繰り返して恐縮ですが、ということであるわけです。ですから、現在の定時制をどのように、改革するということは当然あっていいわけですが、それを一緒にするとか、多部制ができるからそちらをなくすとか、いうことではなく、そういう生徒たちが、集まっている定時制をさらにより充実させるには、どうしたらいいのか、そういうことにおいては、十分検討をしなければいけないと思いますが、もう一方で新しいタイプの学校、多部制・単位制ができるから、即夜間部を統合すると、いうことにはならないのではないかと思います。

毎回申し上げていることを、もう一度言いますが、自宅に近い学校であり、そして少人

数の学校でないと、具合の悪いということを、もう一回繰り返しておきたいと思います。

問題の焦点がいくつかあって、どうしても分散しがちになるのですが、委員長が冒頭に提案されたように、望月の対案をめぐって、多部制・単位制をどうするのかという議論は、当然定時制問題にも、関係することはそのとおりなのですが、多部制・単位制を、ではどうするのかということをまずやる。そして定時制問題を、どうするのかというのは、別のカテゴリーとして議論してもらう。

例えば上田地区に、2校あります。この問題については、今までほとんど議論されていないです。上田地区は、例えば数字的にいえば、この2校で150名以上が在籍をしていて、しかも上田高校は普通科であり、千曲は工業科ということで、これもそれぞれの特長を持っているわけです。その2校を一気になくして、上田地区から定時制をなくしていいのかと、こういう問題も出てくるわけでありまして、定時制の改革もしくは、定時制の配置ということと、多部制問題は関連するけれど、ちょっと切り離して議論をしたほうが、いいのではないかというように思います。

(飯島委員長)

上田地域の定時制高校の話まで、きてしまいましたけれども、当然今回の改革案は、すべてトータル的に考えなければいけないことでありまして、根底には、それぞれ頭には置いておかなくては、いけないと思いますが、今回の望月のことを、受け入れるか受け入れないか、それは今小林委員からありましたように、定時制を、この第2通学区として多部制・単位制の中で、三部制にするという形になれば、はっきり申し上げますと望月では難しいだろうと、いう結論になりますでしょう。

ですから原委員は、離してという言い方をしますけれども、上田地区の方は、切り離して結構だと思いますが、望月の方ではそれは、離しては議論が進まないと思います。ですからその辺のところを考えながら、前回も申し上げました、望月高校の多部制・単位制を受け入れるという形になった場合、前回もお叱りを受けましたが、県のたたき台であります望月と蓼科高校の統合問題は、これが当然のことながら、この委員会では否決されるという形になります。

そうなった時に、果たして両方の高校が、少子化に向かっていく社会の中であって、存続できるような形でいられるのかどうか。と、いうことも当然考えていかなければいけない。その辺のところも含めながら、切り離せといっても、切り離せない問題でありますから、十分その辺はお考えいただきたいと思います。

特に前回も申し上げました、丸子実業が総合学科に転換する、という合意を得ております。丸子実業が、魅力ある学校づくりになればなるほど、この学校要覧を見ますと、1年、2年、3年合わせて、蓼科高校に80名近い子どもたちが、長和、丸子町、武石村から通っております。その子どもたちが、いいことでありますが、丸子が魅力あればあるほど、山を越えてという言い方がいいのか分かりませんが、蓼科や望月へ、行くのかどうかということも、十分考えていかなければいけない。

そんな中から、慎重に意見を、トータルで考えを頭に置きながら、望月をどうするかということの議論を、進めたいと思います。お願いします。

(原 委員)

いいですか。私が申し上げていることと、今委員長のご発言が、違っているのはいいのですが、私が申し上げていることと、少し性格が違っているのです。本論に引きつけながらも一回いいますと、望月の提案は、二部制であると。夜間部は現在のところ構想に入っていない。夜間部を入れると、現在の夜間の定時制が、どうのこうのとなると、いうのですが私はそこは、少し違うといっているのです。

多部制そのものの議論をしていけば、午前部、午後部の二部制も多部制の範疇（はんちゅう）に入るわけです。もちろん夜間も入れて、三部制も可能なのです。それらが二部制あるいは三部制が、学校運営にとってどうかという問題が、この間あちこちで経験をしてきているわけです。二部よりも三部のほうが、学校においては非常に複雑な人的構成になる。そしてそれらが、相互に乗り入れをしたりすれば、なおさらそのことは複雑になっていく。学校運営が非常に難しくなる、そういう局面が予想されるという問題があるわけです。ですから私は、二部制という構想があっても、それはいい。なにがなんでも多部制というのは、その夜間部まで入れて、三部にしなければいけないと、いうことはないと思うのです。

さまざまな生徒が、さまざまなニーズで来ることが予想されます。その場合に、その集まってくる青年たちが、その中で居場所を見つけて、そして自分の目標を確立して学んでいく、卒業していくという、そういう過程を丁寧に見ていくときに、できるだけあまり複雑でないシステムが、より望ましいと思っているわけです。定時制問題については、また後でゆっくりお話しします。

(飯島委員長)

今の意見は何度か、原委員からは出ております。そういうことも頭に入れながら、当然のことながらほかの委員の皆さんは、ご意見を出していただければ結構だと思います。

(荻原委員)

大変悩ましい問題で、委員長が言うように蓼科、望月が、丸子実業が総合学科になったときには、相当な吸引力があって、現在普通科 120 で職業科 160、多分 160 が総合学科になったときには普通科と同じ格好になると思うのです。塩尻志学館を見ても、選択科目あるにしても、そういった意味では上小地区、5 区に普通科の定員が増すというのは、私の前からの主張でございますが、そういう中で蓼科、望月が学校運営できないような格好になるのは、大変つらいことだと思うのです。そういうことで、望月自体も存続という意味で、多部制・単位制を選んだと、いうそういう決断があると思うのです。

一方全体的に見れば、野沢南は 240 という募集を、かけているわけですが、これが多部制・単位制になれば、クラス半分程度になるという予想でございます。6 区の、つきましては普通科が減るという格好に、選択の幅としては非常に狭くなると私は思っています。私立の動向が気になるわけですが、長聖につきましては、中学から入れて今回も 340 という、自分のところの中学からも入れて、多分 340 の募集ということだと思うのです。

関連するのですが、丸子実あるいは千曲では、今回募集要項見ると、商業 1 クラスずつ減らしているわけですよ。6 区では小諸商業で、商業 1 クラス増やしていくような、それ

で野沢北高の普通科は1クラスにするという格好で、昨年から見ると今回の特徴が、あるわけですが、そういう意味では丸子実が、総合学科になって相当な吸引力を、地元からもある。あるいは望月から蓼科からもあるという格好になれば、委員長のいうように蓼科、望月の、現在120名、80名という募集が、可能なかどうかという大変悩ましい問題です。

そういった意味で、蓼科、望月を統合して多部制・単位制を選んで、二部制でやっている、あるいはそういった格好で学校が存続できれば、ほかの通学区でも、ジョイント式というような格好であります。そういった格好で何とか地域校という、地元の熱意に耐えられる案としては、便宜的な格好で申し訳ないのですが、蓼科、望月を統合して多部制・単位制で、転換したらどうかという、そういった非常に特徴を持った地域の高校としては、鉄道沿線ではありませんけれども、ただ鉄道沿線だけが残ればいいと、いう問題ではないと思うので、地域校については、やはりスクールバスなりそういった格好で、十分対応できる方向になり得るのではないかと思います。

望月高からの提案は、ありますけれども、蓼科、望月というふたつの高校合わせて、200名規模になるわけですが、そういう中では、単に登校拒否とか途中の学業不振とか、そういうことを受け入れるばかりではなく、進学対応型の部分も残していけば、十分存続できるのではないかと思います。

皆さんが三方一両損ではありませんが、そういった格好で地域校を残していかないと、ますます鉄道沿線だけを残していけばいいと、いう格好で議論が進んでいくのではないかと思います。

定時制につきましても、そういうことになれば、現在の定時制は、十分な存在価値があるのではないかと、いう格好でここにいっぺんにできるではないですが、定時制については取りあえず残して、検討していかなければならないのではないかと考えております。よろしくをお願いします。

(飯島委員長)

確認いたします。荻原委員の考えは望月と蓼科を、一緒にして多部制・単位制にするということですか。

(荻原委員)

そうです。

(西村委員)

この第2通学区で、われわれは多部制・単位制を導入しようと、何回か前に決めました。その時のわれわれの導入しようとした考え方に、もう一度戻って欲しいと思います。その後、望月高校から提案が出ました。つまり新たな二部制での、多部制・単位制という概念が、出てきましたが、私自身は、もう一度我々が導入しようと思ったときの、多部制・単位制のイメージに戻って欲しいなと思います。

ということは、広く一般の社会人の方にも、開放する多部制・単位制。外国籍の方々もこられるような、多部制・単位制。それからよりよいアグレッシブな対応する。つまり進

学対応や、英語に特化するとか、部活に特化するとか、そういったイメージの多部制・単位制を、われわれは考えていこうじゃないか、ということを議論したと思うのです。

また先ほど原委員が、おっしゃたように定時制のイメージが変わりました。昔の勤労青少年が、行く時代とは違います。だからこそ私は、三部制をとって昼間、夜一括して見るそういった学校が、必要だと思うのです。

そういう見地からすると、大変申し訳ないのですが、多部制・単位制を考えるには、利便性が一番必要なキーワードではないかと私は思います。寄宿舍だとかそういうことも考えました。でも今申し上げましたように、いろいろな方々の人を取り入れる、来ていただく、多部制・単位制であればこそ、三部制を考えた学校改革をすべきだと思います。それからすると大変厳しいですが、望月の提案はなかなか厳しいなという感じが、私はいたします。

（和泉委員）

私も考えをずっといろいろな形で検討してきて、皆さんの意見も知り、自分でも調べ地元に行ったりして、考えてきたのですが、前回の望月さんのほうから、多部制の導入の意思表示があって、これはそれなりに評価し、その中に教育プラットフォームの話がありましたので、中身的には非常に賛同を得る部分があった。

他方統合していく中で、どうするかということで、提案があったわけですが、夜間のほうがないと、いうようなことがひとつと、中身的には非常に理解するものがあるし、今後の高校運営には、生かさなければいけないということは、十分に反映しなければいけない。

そういう中で私も、荻原委員さんとはちょっと違うのですが、利便性の中で通学というのは、部活をしたり試験があったり、時間がいろいろあるし、スクールバスということもあるのですが、やはり程度の一定の時間の間隔を、置かなければいけない。そういう面では非常に今、しなの鉄道沿線もしくは小海線沿線のほうに、利便制があるので、私はその沿線の中に多部制・単位制の高校はどこか、やはり設立した方がいいのではないかと。導入には賛成です。

望月高校の意見を見ると、ここは誠に賛成なので、あの中身を生かした形で、蓼科と望月の学校運営の中で、ぜひ具体化していただければいいのではないかと。ある面では非常にいい提案を、もらいながらするのですけれど、前向きに考えていくと、その中を尊重しながらあるべき形で、収まらなければいけないのではないかと、私自身も非常にづらい意見をいっているつもりなのですが、結果的にそれが一番いいのではないかなと思っています。以上です。

（遠山委員）

ただ今望月と蓼科を多部制にして一緒にすれば良いという意見を、初めて聞いたのですが、これはとても受け入れられないことですね。地域高校というのはそんな簡単に、考えてもらっては困ります。地域高校は、本当に命がけでやっているのです。子どもをよくしなくちゃ子どもは来ないですよ。本当に命がけで地域の者が、望月だって同じだと思いますが、いい子どもにしているですよ。魅力をつくっていかなければ、絶対に生き残れないのです。

鉄道沿線の学校とは違います。その中で、地域挙げて命がけで学校を、よくしていかなければ、こういうことをよく分かってもらいたいですね。

数合わせで、地域の高校だからどうでもいいやという、そういう考え方では私は納得いきません。以上です。

（中沢委員）

今遠山委員さんが、おっしゃったことには同感でして、同じように望月高校も、考えていると思うのです。だからこそ質的に同じような内容の、望月の話であればこれは駄目だと、そこで望月の皆さんは、新たな発想の基に多部制・単位制で、本当に地域に根差したそういった学校を、地域のどこかにつくっていいんじゃないかと、そういう発想のもとに、教育プラットフォームができ、そして多部制・単位制の発想ができたのです。やはりその気持ちは、大事にしていかなければいけないと思うのです。

やはり多部制・単位制は、交通の利便性が高いというのは、確かに筋としてはいいのですよ、しかしもっと大事なことは中身で、その地域の人たちが、それに向かってみんなでやろうじゃないかという、その気持ちがあるかないかということで、どこかに押しつけて、多部制・単位制をやってくださいでは、駄目だと思うのです。そこが基本的に考えていかなくては、いけないとこかなと思います。

（飯島委員長）

前回も同じようなご意見は、中沢委員から出ておりました。そういうものを含めながら、繰り返すようですが、望月に多部制・単位制を、置くという形でいいのかどうかと、いう議論をお願いしているわけです。

今のようないい意見、和泉委員の意見の中にも、とても望月の提案は素晴らしいと、ただそれを多部制・単位制で残す形よりも、というふうなご意見でした。多部制・単位制でなくても、いいものは残せるだろうと、そういう発想であります。

遠山委員からは、降って湧いたような、望月と蓼科が統合して、しかも多部制・単位制なんて冗談じゃないと、いうご意見であります。まさしくこれは数合わせで、両方ともそっち側へ、持って行っちゃえばいいみたいな感じで、私もびっくりして聞いていたわけですが、いかがでしょうか。もう少しご意見いただきます。

（太田委員）

先ほど西村委員からありましたとおり、多部制・単位制高校の基本的目的、コンセプトをもう一度考え、再確認して、それにふさわしい高校はどこに置くべきか、という視点で考えていくべきではないかと思っています。

定時制については、原委員から何度も、悩める若者達の居場所は従来の定時制高校のような小規模の空間でしかなく、これ以外の場所での適応は難しいということで、現定時制の継続の必要性がだされています。私は、これについては、いろいろの知恵を出し合い、対応策をとれば解決されるはずであると考えております。学校運営の効率性、教育の生産性の観点からも、何箇所に分散しているものを統合することは、大きな意義があると考えております。

また、外国人や、高齢者に教育機会を開放するというこの方式の学校は、国際化、高齢化の動きに対して多くなる価値を提供してくれると思っています。高齢化の中で、年をとって再度勉強をしてみたいというニーズはますます多くなるはずであり、そうなりますと交通の利便性を最優先で考えていかななくてはならないと思います。私は上田に住居があり、定年になったら再度勉強をしたいという気持ちがありますが、望月高校までどのように行くのか、経路もよくわかりません。通学するとなるともっと難しくなるだろうと思っています。

それから私は、いろいろの国の人々と、心と心の連鎖をつくりあげていくことが国際化ということではないかと考えていますが、この地域においても、外国人の皆さんとの交流の場をもっとつくる必要があると思っています。上田、佐久地域は多くの外国人が居住していることで有名であり、教育ニーズはかなり高いと判断しております。この学校が「外国人の居場所」としての機能をもつことで、一步踏み込んだ、国際化への足がかりがつけられると思っています。

このようなニーズがある中で、失礼な言い方になってしまいますが、われわれでも道筋がわからない望月高校に外国人が行けるのでしょうか。場所の設定については、やはり利便性が第一条件になると思います。

私は勝手に、この学校形態を「コンビニエンス・ストア方式」と命名しておりますが、基本コンセプトは「いつでも、誰でも」です。朝7時から11時まで門戸を開放して、いろいろの教育ニーズをもったお客様の受け皿となることでこの学校の目的が実現されるはずです。そのような観点から、私はいっそ上田駅前のビルに設置したらどうかということをも再三申し上げてきているところです。

もう一つ、この学校は若者、中高年者、外国人等の多くの人々を集約することができますので、都市づくり、町づくりという観点から多いにメリットがあると思います。そうなりますと上田市より地盤沈下している小諸市の方が良いかもしれません。小諸市に設置すれば佐久、上小地区からの利便性もよく、町づくりという意味でも活性化につながるのではないのでしょうか。

（佐藤副委員長）

私は前々回申し上げましたが、望月高校出身でありまして、その中で統合の話をしたと思うのですが、今までの委員さんが、お話になったことがみんな頭の中に入っております。そういう状況の中で、統合という発言をしたわけで、この2通では、今の状況の中ではこれからどういうふうに、望月高校の伝統とか、そういうものを受け継いでいくかと、いう問題があるのですが、いずれにいたしましても、このままですと望月高校が、名前がなくなってしまうという、唯一の高校です。

そういう中で私が、前回どういう発言したかといいますと、本来この高校改革プランというのは、これから平成31年までに向かって、どういう状況が来ても、足腰のしっかりした高校、今対象になっている高校以外にも、そういう足腰のしっかりした高校を、つくってしまおうというのが、一番基本的な考えだったと思うのです。

そういう中で、蓼科と望月が統合して、しっかりとした足腰の強い学校になれば、いろいろの問題があるでしょうけれど、一番良い選択ではないかなということで、あえて発言

したわけです。

その中で私は、望月が消えて蓼科が残るという構図は駄目。これは県教委のほうで、あらかじめ統合はあくまでも、フィフティー・フィフティーの統合ですよ、場合によっては場所も変え、名前も変えるというぐらいの大胆な提案があれば、これほど私はほかの地域についても、そんなに大きなデッドロックにはまらなかつたのではないかと思います。

そういう中で今後、もう1回くどういようですが、統合していい学校をつくるということに、教育委員会のほうも強力なリーダーシップを発揮して、統合になったならば1か0でない、ふたつ合わせて3になるくらいの学校を、つくるのだということを、しっかりリーダーシップを、発揮してやってもらいたいと思います。

私の案は前々回も申し上げましたように、すべての条件を勘案して、統合が一番ベターでないかなと、思っています。以上です。

（宮阪委員）

お願いします。丸子が総合学科に、転換になることが決まったわけなのですが、丸子は普通科3クラスというのは、なくなるということになるのですね。以前いただきました、県立高校再編候補案についての、説明資料の中に、蓼科高校と望月高校の統合という資料がありましたが、蓼科高校は、地元立科中学校卒業生の半数近くが、入学しています。そして旧第5通学区と隣接しています。

平成17年度の入学者118人のうち、上小地域から52人が入学しています。入学者の44パーセントが、第5から入学している状況は、第5に隣接していることと第5における学校数からみても、当然と考えられることでありまして、特に依田窪地域からは、峠越えが必要で、生活圏は違いますが、蓼科高校までは意外と近く、20分前後で通学できる場所があります。また長和町からは、依田窪南部中学校経由ですが、蓼科高校行きのバスが運行されております。17年度においては、依田窪南部中学校卒業生の13.6パーセントが入学するなど、毎年1割以上の卒業生が、蓼科高校へ進学しております。このように蓼科高校は、依田窪地域にとっても、第5にとっても、地域高校としてこれからも、必要な高校と、考えられると思います。

一方望月高校をみますと、地元望月中学校卒業生の23.5パーセントが、望月高校へ14.3パーセントが、蓼科高校へ入学しています。また望月高校入学者の25.4パーセントが、第5通学区から来ています。地元中学生の卒業生のほとんどが、望月高校以外に進学しております。入学者の充足率が、定員に満たないという状況が、続いている現状をみますと、地域高校としての役割を、考えましたとき、県の示す再編成候補案のとおり、蓼科高校との統合をして、新たな学校でスケールメリットをいかして、充実発展が期待できるのではないかと思います。

2校は共に、地域との連携が強いので、統合後も両校の長所を取り入れながら、地域と連携をいっそう深めて、いかれるのではないかと思います。望月、蓼科両校は、統合によって蓼科高校の敷地・校舎を利用して、新たな高校が設置されるわけですから、佐藤委員さんのご意見のように、新しい名称の高校にするというのが、いい案ではないかなと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。望月高校の多部制・単位制を、ひとつ飛び越して統合の話まできております。望月高校の多部制・単位制のことを取り上げたのは、当然のことながら対案として提案をされた重い一案でありましたので、この委員会の中で、これだけ討議を重ねたわけであります。

だいたい議論も、出尽くしてきたように思います。望月高校を、多部制・単位制に転換するという提案について、この委員会では、この提案を受け入れないで、多部制・単位制はほかのところで、考えていこうということで、とりあえず望月の提案は、この委員会では、受け入れないという形にしたいと思いますが、いかがでしょうか。

(佐藤副委員長)

私をはじめ、それぞれの委員さんの意見の中で、だいたいそういう方向かなと思うのですが、ただ多部制・単位制は、望月は提案しているわけですね。一方野沢南は多部制・単位制は、困るという形になっております。望月の多部制・単位制はひとまず推進委員会の結論として、望月では無理だろうという仮の結論を出していただく。次の段階として望月が、仮に多部制・単位制をおりたとした場合に、統合をどういう形でするかということを、きっちり担保しておいてもらわないと先に進まない。これは望月の条件として、ここでゼ口になってしまったのではないと、いうことをきちっとされないと、望月の人は、たまったものではないという気はするのです。そこのところだけしっかりしておいてもらって、仮に今の段階では、一応望月は仮の決着をしたという形で、先に進めてもらっていいのではないかと思います。

(飯島委員長)

望月の多部制・単位制の提案は、とりあえずこの委員会では否決した。そしてプラス幾つか佐藤委員、宮阪委員から前向きな、これは県教委のたたき台であります、統合していい学校をというのがありますから、しかもそれについては、佐藤委員から、ある程度付帯決議のような吸収合併でなく、1対1で統合してそれが三つになるぐらいのいい学校を、つくるようにということでもありますから、当然両方の、伝統のいいところを取り入れながら、校地は、例えば蓼科を使うにしても、内容については、両校のいいところを取り入れながら、新たないい高校をつくっていくという、前向きな付帯決議を付けながら考えていくと、いうことにしていってどうなのか。そのように今の佐藤委員からの、意見を受け取ったわけです。ですから当然望月の多部制・単位制を否決した後に、統合の話まで含めたご意見をいただきたいと思います。そしてその方向に、進めていきたいと思います。

(原 委員)

おおよそ佐藤委員さんが、ご発言されたことに含まれるのですが、望月の対案も否決ということではないと思うのです。望月の対案をめぐっての議論を、この間一定集中的に行ったと、そしてそれについては、交通の利便性が優先するのだと、いう意見が一方では非常に多かったということですよ。しかし望月の対案の中身を支持する意見というのは、私に限らず、何人もの方が賛同されておられますよね。そうするとそういうことを含みな

がら、望月の対案についての議論はここで、いったん締めくくるということではないでしょうか。否決ではおかしいわけですよ。

（飯島委員長）

言葉足らずですみません。多部制・単位制という提案については、否決という形であるが、内容については当然、提案内容のいい点は生かしていく事であります。そういうことで、ご理解いただきたいと思います。

（中沢委員）

すみません、今おっしゃったことと、原委員さんがおっしゃっていることは、ちょっとニュアンスが違うかなと思います。私も同じような考えなんですが、多部制・単位制は望月はもう否決だよという考えでは、ちょっとまずいかなという気がするのです。じゃあもっといい場所があるのか、もっといい場所があって、ここなら誰も賛成できるよという方向ならば、それはそれでいいのですが、ここですべて望月の案を否定してしまった場合には、それがまた再び上がってくることはないということですよ。

だから佐藤委員さんのおっしゃっていることは、一時的に仮にここは結論を出しておこう、しかし場合によると、それがまた浮上することもありうるという余地を残しているのですよ。と私は受け取ったのです。これはすべて否定するのではなく、場合によってもっといいところが、あればそれはそれでいいかもしれないが、多部制・単位制高校をどう考えていっても、やっぱり望月だなということもありうる、というそういう余地を残しておくと、私は解釈しましたが、私もそんな考えなのです。

（飯島委員長）

こういう言葉があるかどうか、仮決定というのでしょうか、取りあえずこの先、議論が進んでいくためには、それをしていかなないと、先に進みませんから、望月を多部制・単位制にするということは、とりあえず見送って、その先に蓼科との前向きな統合を、取りあえず視野に入れながら、ここは終わりにして、次の議論に入っていくということで、よろしいですか。

（荻原委員）

前もそうだったのですが、総合学科をやることは必要だという、議論から入っていきまして、今回も多部制・単位制は必要だという議論から入ってきました。それで望月の対案があり、皆それぞれの意見がございます。そういう中で、中身を生かしてとか、望月の対案をいかしてとか、というそういう総論賛成でいってしまうと、これが県教委のベースだと思うのです。

だからこれだけの大きくなっている議論を、もう一回り大きくしたって別にかまわないではないか。時期的に28日で1月9日だと、どんどんやるのはいいですが、やはり総論でおされていってしまうと、私の考えとすれば、もうこれでいいのだと、そうならざるを得ないと思いますので、中身をいかすとかそういうことは、関係ないよう気がします。

望月の教育方針を生かすとか、そういう今までの議論の中で、精神を生かすというのは、

いったん望月は多部制・単位制を否決されれば、中身ももういわないことではないかと、いうふうに総論からいってしまうと、そういうふうに結論せざるを得なくなるのではないかという、危険性を指摘しておきたいと思いますので、委員長のご判断を、お願いしたいと思います。

（飯島委員長）

報告書の中までの話になりますと、そういうものは、付帯決議で付けばいいと思うのです。この委員会の中では、統合に関してはこういうことを考慮して進めて欲しいと、いうことは前回の総合学科の時と同じように、付帯決議が付けられると思うのです。

（荻原委員）

付帯決議というのはひとりでもできるのか、全体としないと多分できないと思うのですよね。だから例えば両論併記ということになれば、私は一個人の意見でそこへ付けていただけなのかと気もするのですが、付帯決議というのは委員長の考えとすれば、全体で多数決で半分賛成ならば付帯決議、半数半数か両論併記とかそういう、委員長の方針とすればどんなニュアンスで、いっていらっしゃるのか、ちょっとお願いしたいのですが。

（原 委員）

申し上げたい事はですね、多部制・単位制をどうするのかという議論を進めているわけです。何回か前に、この通学区にも多部制・単位制を、入れようという確認もされました。それをさらに具体化するための議論を、進めてきました。その時に望月からの対案が出されて、それについて議論をした。さっきも同じ事をいいましたが、これについては賛否両論あった。しかし望月は利便性の点で、難があるという意見が多かった。そういうまとめで、いいんじゃないのでしょうか。否決をするとか、そういうのではなくて。望月の対案について集中議論をしたけれども、利便性について難点があると、いうことでとりあえず望月議論を終えて、それでは今度は、野沢南の多部制転換というたたき台をめぐって、野沢南さんから、うちでは困るという意見が、出されているわけですが、それをめぐっての議論をする。そうやって多部制議論を、個別にやっていって総合的に判断を下す。これが議事の流れではないでしょうか。

（遠山委員）

私は難しい立場にあり、なかなかいいにくいのですが、望月高校との関係もありますし、佐藤委員さんと同じように望月も出ていますし、しかしこういう席で、中立的な考え方でいかなくはいけないという気持ちに、どうしてもなるわけですが、この委員会で付帯的なものを付けないほうがいいと思います。方向付けだけしっかり決めて、そしてやっておく。あまり付帯的なこといってしまうと、具体的なこと言い出すと、これはここが決定機関のようになってしまいます。

私はどちらかというと、県教委の諮問機関ではありませんが、その骨子に基づいて議論して、ある一定の方向を出すところで、付帯決議まで答申するところではないと考えています。

(佐藤副委員長)

原委員が先ほど提案した形で、議論を進めたらいかかなと思います。望月の場合、一応あるところで議論を切っておかないと、先進められないですね。ですからそういう意味でいいと思います。ただ私は議論する中で、かなり望月の提案の、多部制・単位制は難しいよと、いう中で議論を進めないと、また同じ事を何回も、繰り返しになりますので、私はそういうふうに考えています。原委員さんの提案のとおり、進めてもらえばこれから多部制・単位制を、集中的に進めていただければ、ありがたいなと思っています。

(飯島委員長)

私は望月の提案を終わった後、望月が関わっていた統合の話に移って、その後また野沢からの提案の、自分たちでなくほかへという話に、入っていこうかなと思ったのですが、それでは、この後、先に野沢の話に入っていってよろしいですか。

野沢の話になりますと、かなり具体的な名前が、これから実際に出てこない、と、討議が進みませんが、その辺のところを含めながら、具体的な校名を出していただけますか。もう1回思い出していただければお分かりのように、野沢南高校は、たたき台として多部制・単位制という話で、この間の対案では、自分たちの学校では、多部制・単位制を受け入れるには不的確だと、ほかにもっといいところがあるだろう。しかも自分たちのところには、多くの普通学科希望者の学生が、充足してきている。この子どもたちを、どうするのかというものを含めながら、ほかに多部制・単位制を、設けて欲しいという話であります。そのところで議論をください。

これは頭の中に、もうひとつだけ委員の皆さんには、入れておいて欲しいことがあります。私は先ほど「望月と夢科の統合を済ましてから」と、いう話をしたのですが、それがありませんから、学校を1校減するというのも、頭に入れておかなければいけないと思うのです。

これは私たちの委員会を、設置するための要項の中に、それが最終答申案でもらわれているわけです。答申は17校ある学校のうち2校減らす。そのうちの1校を多部制・単位制に換えてという話になっているのです。そういうことも頭に置きながら、今の野沢南の話にも入ってってください。お願いします。

(太田委員)

この学校づくりは新たな挑戦であり、誰もが経験していないテーマです。ちょっと戻るように恐縮ですが、私は交通の利便性ということを言い続けてきたのですが、利便性にこだわるのは、利便性が、この学校の経営が成り立つだけのお客様を集約できるかどうかに関係があるからです。望月地域にお客様がどれほどいるのでしょうか。望月高校を多部制・単位制高校に転換したことにより、新たな小規模高校をつくることは今回の改革の方向とは逆方向であり、絶対避けるべきであると考えます。

また、私は多部制・単位制高校の建屋には従来の学校建築とは異なる姿、イメージをもってあります。精神的にへとへとになってようやくたどり着くというような悩める若者を、抱きかかえるように招き入れるような、心理学的側面からも検討した建築物ができないかと思っています。

そうしますと既存の学校を使用するのではなく、新たな学校づくりという投資が必要になります。改革は新たな出発でもありますので、新たな教育投資が当然あってしかるべきです。

一つ事務局にお聞きしたいのは、新たな投資の可能性は 100%ないのでしょうか。何とかならないのですか。

（飯島委員長）

これは前回も事務局から答弁があって、既存の学校を使うという話で出ているかと思えます。ですから新たな所に、校地を買ってということはないと、答弁していたと思います。それで間違いないですね。

（吉江高校教育課長）

はい。

（太田委員）

その考え方はもう変わらない。そうでもない、私が極端な例で申し上げている上田の駅前とか、小諸の駅前というこの案は、不可能であるということで、ここで結論を出さないといけないと、ということになりますね。

（飯島委員長）

どうぞ。事務局。

（吉江高校教育課長）

太田委員さんからは、前々からそういうようなご提案をいただいております。私どもといたしますと、基本的にももちろん単独校として設置したい。ただ単独校として設置するには、今現在の全日制を転換するということで、全然お金をかけないという趣旨ではございません。必要な当然ながら内装、外装の変更等必要な部分があるとすれば、それはそれぞれの方向付けをしていただいた、学校の状況を見ながら、手を入れていく必要があれば、入れていきたいとは思っています。しかしながら、今のお話にございましたように、新たに校地を買って、それで校舎を新設してというようなことは、想定しておりませんので、そんな方向で、議論していただければと思います。

（太田委員）

わかりました。ちなみに、私の言う多部制・単位制高校として、新たな発想で建築、デザインのにも工夫した学校をつくるのに、いくらくらいかかるのでしょうか。これでは難しいなら、従来方式の学校建設でも結構ですが、新築、新設するにはいくらの予算措置が必要になるのですか。

(吉江高校教育課長)

おそらく県立高校の場合ですと、50億ぐらいかかるかと思います。小、中学校で30億ぐらいとっておきまして、県立高校の場合、グラウンドの広さとかいろいろございますので、おそらく片手ぐらいは、いってしまうのかなと考えております。

(太田委員)

そうしますと、財政の改善ということも今回の改革の範疇であり、われわれの論議課題でもありますので、新たな投資を求めても不可能であると判断し、従来の私の主張を取り下げざるを得ません。

既存の高校の中からどこにもっていくかを集中して論議をしていただければ結構です。

(飯島委員長)

太田委員がまとめていただきましたように、そのように先ほどから、こちらからお願いをしているわけです。これは各委員さんから、何回か出ていますように、こうなってくると全部が、対象として考えていく必要があるかなと思います。ただ当然のことながら、県教委から出ている、旧6通と5通の学校数、それから子どもたちの数、そんなことを考えると、当然6通の方の学校を、転換するほうがいいたろうという事は感じます。その点今ある5通の中の学校を、転換するにはあまりにも難しいだろう。これはご理解をいただくほうがよろしいかなと思います。6通の中から転換する高校を選ぶというような形で議論を進めたいと思います。

(荻原委員)

そこまで決めつける必要はないと思います。利便性は望月が、バツになって、それで利便性のある上田、そちらの5通がというそこは、留保しておいていただきたいなど。ここで利便性となると決まってくるわけです。6通でも、あとは沿線しかございませんので。そういう意味では、5通では可能性がないよ、ということではなくて、やはり5通は問題視しません、多部制・単位制はいりませんと、いうことではないと思うのです。お願いしたいと思います。

(原 委員)

その事にかかわってといいますか、その前に野沢南の多部制転換というのが、6月24日に突然公表されてから、これは確か私の記憶によると、第2回の委員会が行われた直後でした。その後第3回から前回第13回まで、いろいろな紆余曲折の議論で、集中的な議論をしたわけではありませんが、多部制・単位制について、賛同意見もずいぶん出たと思います。反対意見も出ました。

しかしこれも私の記憶なのですが、多部制・単位制を、いいじゃないかという議論の中で、野沢南の転換について賛成すると、いう意見は聞いた記憶がないのですね。もしそうであるとするならば、今多部制問題集中議論ですから、野沢南高校の転換についてどうなのか、本当に今まで確か、賛同意見も聞いていないのですがいかがでしょうか。そこにずばり議論の焦点を、当てていただきたいと思うのです。

(飯島委員長)

かなり突っ込んだ形で出てきました。全部という形ではなくて、たたき台で出た以上はそれについての議論、しかも対案として野沢南からうちのところじゃだめだよという対案が出てきた。あえて他の高校名は出さないが、うちでないもっと利便性のあるところが、あるのではないかという対案であります。

それではどうでしょうか、野沢南高校をたたき台どおりにしたほうがいいのか、悪いのかこの辺の議論を、進めるという形はいかがでしょうか。その議論の進め方について、お尋ねいたします。

(佐藤副委員長)

これは避けて通れないのではないかなと、県教委から実際に発表されているわけですね。ですから具体的に名前が上がっているのですから、いいにつけ悪いにつけ議論しないで通れない議題だと思います。

それで私は野沢南については、先ほどの利便性の問題もありますが、6通について限定してしまいますと、野沢南が利便性の問題とか、周囲の学生の分布状態とかそういうなかで、県教委もさすがにデータ持って、ここに座っているだけあって、それだけの話是可以のかという気はします。

ただ私は野沢南に関しては、定員はいつも満たされていますし、進学対応の中堅の学校であろうと、認識しております。わたしはそういう中で多部制・単位制を、太田に行ってみてきましたが、私の第一印象はこの多部制・単位制の制度の導入というのは、この導入することによって活性化する学校と、あるいはこれが全く衰退に向かってしまうような制度にもなってしまう。学校の選択が非常に難しい。

何回も申し上げましたが、多部制・単位制は私の感覚ですと、自我が確立した生徒を対象にした、学校であればそれなりにいい方に向かうだろうと思います。自我が確立していない子どもが、いくらホームルームをしっかりとやりますよと言っても、限界があると思います。

ですから野沢南に関しては、太田で見てきた形での多部制・単位制は、そのまま導入してもだめだなあと、思って帰ってきました。そういうなかで私があえていうならば、もし野沢南を転換するならば、進学対応型の学校、つまりある程度自我が、確立している子どもが来る学校を、あるいは独立校でももちろんやるのですが、コース制のような形で、進学対応型の学校として、一回導入してみたらどうかと。そしてあそこには定時制もありますから、定時制も当然考えていく。導入の段階で進学対応型の学校にすれば、あるいは野沢北をしのぐような子どもが何人か輩出する、そういう中で成功していけばいいなと思います。

今まで見てきたような先進校を、そのまま導入したのでは、これはおそらく失敗するだろうと思います。野沢南の同窓会も、その辺のところを懸念しているのではないかと、思うのです。今まである程度グレードがあるものが、端的に言えばグレードの下がった学校になってしまうのではないかと、懸念があるのではないかと私は思います。ですから進学対応型のものを、なんとかくさび形でもいいから入れていくような感じも、新しい制度を導入した、野沢南であればいいのかなと考えています。以上です。

(飯島委員長)

この意見も、何回か佐藤委員から、出たご意見であります。ほかに野沢南の転換についていかがでしょうか。

(荻原委員)

私は地元ですが、そういった学校で毎年 240 人毎年入ってきている、そしてあの地区では中堅の進学校でございます。推薦枠とかいろいろな部分でも、私の娘もひとり行きましたが、そういった意味では中堅の学校であり、女子高の伝統もあるという、学校でございますので、それをいろんな格好の、多部制・単位制が考えられるわけですが、ちょっと無理なのではないか。今まで野沢南へ行っていた中程度の、北高には入れない、はっきりいって長聖にも試験で難しい、岩高よりワンランク下がるという、中程度という言い方悪いですが、私は佐久の高校の出身ではありませんので、適当なことっていますが、そういうことでみんな見ている。そういうことで 240 人の中堅の進学校をなくしてまで、多部制導入する必要はないのではないか。それが第 1 点ですね。

それから利便性という面では、県教委の中では 10 分程度、中込駅から 10 分程度ということでございますけれど、自転車で 10 分から 15 分ぐらい、うちの娘も中込駅から通っておりますから。千曲川を渡って向こうまで、歩けばそうとうかかります。そういった意味でも、利便性という面でも提案がございましたことで、ちょっと難があるのではないかな。

では自分はどう考えるのだといわれると、例えば岩村田の駅、小諸の駅、考えれば近い高校あるわけですね。それは普通科高校も職業高校もありますが、そういった意味ではその辺も視野に入れても、別に面積からちょっと無理な面もあるにしても、考えてもいいのではないかと思います。

(中沢委員)

野沢南高校について、ランクが上だとか下だとか、そういうことは私はあまり論じたくないし、そうあるべきでないと、基本的に考えています。そういう立場でなく、佐久の全体の立場で考えたときに、240 名の定員に対して充足率 100 パーセント超えていることと、それから 242 名、今年度現在いるのですが、そのうちの 241 名が、確か旧 6 通なのです。それだけ地元に着した学校なのですね。そこが多部制・単位制になった場合に、全日制普通科がなくなるということは、これは現状において、非常に大きな地元にとっては問題なのです。

これは 20 年ぐらい先になったらわかりませんよ、これは子どもの数が減ってきますから。それはそれで違うのですが、現時点で少なくとも 10 年ぐらい先までは、この野沢南校の位置というものは、佐久地域にとって非常に大事なのです。私は長いこと地元佐久にいますけれども、それは本当に痛切に感じています。ですから多部制・単位制になって、全日制がなくなるということは、地元とすれば当然受けられないという話は、十分理解できます。

(西村委員)

仮定の理論だと思いますが、私も仮定の理論をしますと、もしそういった感じだとすると、周りの高校は変わらざるを得ません。というのはまさしく240名どこへいくのか。そうしたら臼田高校も、変わらざるを得ないのです。また岩村田高校には、今普通科4クラスで工業科が3クラスございますね。その学校をどうすべきか。変わらずを得ないのです。今から240名どこへいくのかという心配ではなくて、それは各学校が変わるのですよ。私はそう思っています。

それからこういう議論をする上で、一番大事なことは先ほど太田委員が、確認されたので、既存の設備を使わざるを得ない。長野県の現況を考えますと、三部制で考えると食堂の設備がどこにあるのか、それから単純なクラス単位でなくて、チューター制等々ありますから、ある程度の教室を確保しなくてははいけないのです。ではどういう学校が考えられるのか。設備の面ではそういった見地から考えるべきだと思います。

それから利便性というのは、これなかなか議論の余地がありますけれど、何をもって利便性とするのか。また冒頭、委員長がおっしゃったように、5区と6区の学校の数、生徒の動向、これから生徒がどういうふうに減っていくのか、それらがポイントになると、おのずとどの辺でつくるべきじゃないかというのが、最終的に決まってくるのではないかと私は思っています。だから240名がどうこうでなくて、そうなったらほかの学校も、変わらざるを得ないと私は思っています。

(飯島委員長)

そここのところが、一番大事なところだと思います。野沢南をただ残すということになりますと、実際生徒の数は減ってくるわけですから、どこかを除していかなければならない。それをどこにしていくなのかということまで、頭に入れて議論に入っていかなければいけないのであろうと子どもの全体数が減ってくるわけですから、仮にそのまま野沢南がずっと充足を、いい意味で続けていければ、ほかの学校は当然少なくなってくる。絶対数の子どもの数が少なくなってくるわけですから、ほかの学校は統廃合を必ずしていかなければいけない。学校編成に入っていかなければならない。これも頭に入れながら議論を続けたいと思います。

ちょうど1時間半になりました。ここで10分ほど休憩して、その後入りたいと思います。よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは、委員会を再開したいと思います。ちょっと私の方から整理をさせていただきます。望月高校の対案については、議論を尽くした。いろいろな内容については、学校の魅力づくりの中に生かしていくことが、できるだろうということで、ひとつの結論をみた。その後、同じように多部制・単位制の提案があった、南高について議論に入ってきているわけです。

ここでちょっと逆戻りするようですが、提案とすれば、この第二推進委員会では学校減

をしなければいけない。その中で、統合という問題がたたき台として、今の望月高校をからめた、たたき台として出ております。これについては、佐藤委員、宮阪委員からも、これはいい意味で統合をして、新しく魅力ある学校づくりをする提案が出てきています。こちらのほうの話を少しして、これが統合という形で、委員の皆さんの合意ができれば、今度は多部制・単位制の転換校の、集中討議に入れるかと思うのです。

これが、まだ、望月と蓼科の統合の結論が出ておりませんと、合わせて、全ての学区の中で、減のことも頭にいれながら、討議を進めなければなりません。そういうところで、どうでしょうか。私としては望月と蓼科の、先ほど付帯決議という言い方で、遠山委員からお叱りを受けましたが、統合となった場合にもう少し細かいことについては、いろんな議論は積み重ねるとして、そのような形での方向性はとりたいと、思うのですが、いかがでしょうか。

（原 委員）

先ほど休憩の前に、多部制の問題について議論を、続けると確認をされたばかりですから、そして、野沢南の問題について、今、2、3の委員さんからご発言があって議論が始まったわけですから、このまま続けていただきたいと思います。私も、休憩前から発言しようと思っていたのですが、そういう休憩前の確認で、進めていただきたいと思います。

（飯島委員長）

原委員から、そういう話が出ましたが、どうでしょうか。私の方の提案にするか、それとも、蓼科、望月の統合の話はそのまま保留にしておいて、野沢南の方の提案に入っていくか、その辺のところを、先行き議論をしていくのに、非常に大事なところだと思いますから、運営上についてちょっとご意見いただければ。

（荻原委員）

ひとつその場合、委員長のこの体制としては、そういう大勢になると思うのですが、ただ、望月高校が多部制・単位制をやりたいということで、手を挙げた状態で、それは一応利便性という部分で、問題があるという結論になりました。そうした場合に、手を挙げたところのほうは保留というか、ほとんど否決ということではないのですけれども、利便性という面で疑問があるということで、結論が出ましたので、そうすると、手を挙げたところに、やらないということは微妙な問題で、ここで統合せざるを得ないということは、私も含めて、皆さんがそうせざるを得ない部分はあるのですが、まだ、その姿が見えていないということだと思います。

そこは一応、暗黙という言い方は悪いですが、そういう格好で、望月と蓼科については、手を挙げたのに、それに関しては受けるところがなかったらどうするのですかと、そのような微妙な感覚でやった方が、いいのではないのかと思います。

(飯島委員長)

それが、万が一ほかに適当な学校が見つからなかった場合は、また、それはこの委員会の中ですから、戻ることは、みんなの総意で戻る分には構わないと思います。それから、もっと戻ることもあり得ると思うのです。多部制・単位制というのは、とりあえず見送ってという話も、あるのかもしれない。ですから、もう少しそういう面も、前向きに考えていってほしいと思うのです。

もっときっちりいってしまいますと、望月高校の対案の出し方は、自分たちが統合になる、それを回避するために多部制・単位制を、あえて出してきたという文言がありましたし、代表者の上野さんも、発言していっぱいます。ですから、その辺のところはここで、ある程度、最終的結論までいかなくても、結論的なものを出す方が、私はいいのではないかなと。繰り返しかえしますが、万が一ほかに多部制・単位制に、転換する高校がなかった場合、それでは望月に、それにともなってどこか違う学校を統合するなり、ひとつなくすなりという、議論が当然出てくるわけです。

(佐藤副委員長)

今のような状態で議事を進めるのは、確かに議長としては難しいと思います。ですが微妙なニュアンスでという、お話もありました。大勢は、統合という形になっているという話の中で、それを頭の片隅におきながらやるというのも、いいやり方かなと私は思っています。というのは、また変な発言をするわけですけども、例えば統合ということを考えた時に、野沢南は多部制・単位制は絶対お断りしたいと、というようなニュアンスがある中で、例えば野沢北と野沢南が統合する、そして「野沢高校」になるというような選択肢もあるわけです。

これは佐久長聖が非常に力をつけてきた。長野県に4校ぐらいはすごい高校がある。そういう中で、野沢北と野沢南が一緒になって野沢高校になるということになると、非常に大きなパワーのある学校になる。そうなりますと、統合がそこで、例えば承されたとすれば、再度、多部制・単位制は望月に復活してくるのではないのでしょうか。ただし、望月の場合も、条件つきで、例えば2学級切った場合は廃校になってしまいますなど、いろいろあると思いますが、少なくともそういう中で考えて、だからいろいろな形のものが、微妙にリンクしているわけです。ですからここでいったん、すばっとやってしまうほうが、確かに議論はしやすいのですが、いったんここで決議してしまうと、それをまた再度やるようなことになりますので、その中で、大勢はそうなのだということで、頭のすみにおいていただいて、多部制・単位制を論じ、この14回になって初めて、このような意見を出して誠に恐縮ですが、例えば野沢南は多部制・単位制よりも、野沢北と合併して、もっとすごい高校になるのだという、発想になれないかどうかと考えているわけです。そういう意味で、私は多部制・単位制の望月というのは、一応体制は合っている、ペンディングということにしておいたらどうかという、気持ちで発言をしております。以上です。

(小林委員)

多部制・単位制を棚上げにしておく。県の案は、第2通ではマイナス2、そうすると、2つ減をまた真剣に考えていくという段階になるわけです。それで、例えば望月さんが、「ではなりましょう」といえば、「ではそこへ」というような次の段階に、なっていくのではないかというふうになり、話し合いが混乱しクイズを解くみたいな感じと、いっては大変申し訳ないですけども、委員さんの考えが全部同じでなく、あらゆる場面にからんでくるので、議論しても同じ方向にいくということは難しいと思います。今回多部制・単位制は、一応、棚上げしてなしと。それでは、2校減はどの学校とどの学校になると思う。この委員会とすれば片方を多部制・単位制にしていくと、というような方向で進んでいかざるを得ないのではないかなと思います。

望月さんを話の途中で入れて、また元に戻り、また入れて、ではほかの学校はというのは、今のようないろいろな議論が出てくる。今日お休みですが、芹澤委員さんは、ひとつずつ確実にやらないと議論は進まないというお話も、その都度いただいております。その方向でこの委員会は、議論を進めてきたと思います。十分整理して進めていく、ということも大事になると思っています。

(西村委員)

今日の流れの中で、前半戦から、多部制・単位制の議論をしていました。私もその中で、のっとなって、やっていけばいいなと思っていたのですが、冒頭、委員長がおっしゃったこと、それから、今、小林委員のおっしゃったご意見に私も賛成です。というのは多部制・単位制の学校を議論していくと、先ほどいいましたように、学級数、学校数、それから生徒の動向が、微妙に絡んでくるのです。そうすると最終的にどこを統合するのかという議論があると、議論の進め方としては、やりやすいと私は思います。

そういった意味で、蓼科、望月は最終的には議論になるかもしれませんが、統合をどういうふうにこの地区で、われわれは考えるのか、その議論を先にした方が、話の展開はやりやすいと思います。小林委員の意見に賛成です。

(飯島委員長)

私も同じように提案のあった、望月、野沢南の多部制・単位制の提案の、議論を進めていくほうがよろしいかと思いますが、委員会を進めていく議論をしやすい形は、私が冒頭にいいましたように、また小林委員、西村委員からもご賛同いただきましたように、そのほうが議論は進みやすい、発言しやすいと思うのです。

万が一、いやそれはもう1回望月に多部制・単位制を戻そうよといったときは、また、みんなでそういう意見になれば戻せばいいことで、でも、やはりここでは、ひとつの結論をつけて先に進みたいと思います。多数決をとりますと、また1票、2票違ってという話になりますけれども、ぜひ全員のご賛同をいただければ、ありがたいなと思います。

(原 委員)

議論が多岐にわたり錯綜(さくそう)するのはやむを得ません。しかし、ひとつずつ確認していきましょうということも、そのとおりだと思います。ですから、総合学科については、丸子というように、確認してきたりしてきているわけです。そして、多部制問題については対案がでた望月について、今回も議論をして、利便性の点で難があるという意見が多数を占めた。ですから、望月の対案については難があるという、こういう確認でひとつひとつついているわけです。

6月24日の公表以来、ずっと野沢南の転換については、議論をしていないから、ぼちぼちやらなくてはだめではないですかと、いうことで議論を始めたにもかかわらず、この議論がデットロックにぶつかっているわけではないのです。まだ、ほんのわずかな時間でありますから、それをまた元に戻るとというのが、よくわからないわけです。

(飯島委員長)

わかりました。野沢南の議論をしないということ、を、いっているわけではない。野沢南の議論をより深くするためには、そういう結論を経由していったほうが、より深く話し合えるということでもあります。ですから、そのような形で進めたいと思います。

とりあえず、前向きに蓼科高校、望月高校を統合の形で、いわゆる対等の形で合併するというような形で、このあとの議論を進めていきたいと思います。そうしますと、1校、この第2通学区では減になりましたから、あと1校、多部制・単位制を変換する高校があるならば、それを見いだしていくという形で議論を進めていきたいと思います。

それにはとりあえず、たたき台で出た野沢南高校、これではなくて、ほかか、あるいは先ほど荻原委員から出たように、5通も含めてのところに、よりいい多部制・単位制の転換校があるならば、それは意見としてどうぞお出しいただきたいと思います。それではお願いします。

(西村委員)

今の委員長の進め方は、少し性急すぎるかなという気が若干します。統合につきましてはいろいろな意見があって、県教委は、蓼科とそれから望月という案を出しました。それから、私も頭の中にちょっとあったのですが、佐藤委員から新・野沢高校の議論がありました。けれども、せっかくいただいた資料がございますので、3枚目の第1回推進委員会の資料10の、今、各学校がどういった状況の、充足率があるかどうか、もう少し頭に入れた上で、それぞれの高校をどうするべきかと、いうのをもう一度整理しましょう。そしてその中で最終的にやはり、蓼科、望月というのが、いろいろな意見が出ていますけれども、なのであれば、そういった形でもっていったほうが、私はよろしいかと思います。

(太田委員)

西村委員のおっしゃるとおりで、私も賛同しております。それについては、原委員のいろいろな提起がございますが、本来、これは望月高校の提案を、われわれが一度論議したというところから、こちらの方向にきておりますので、本来順序が逆だったと、私が前回申し上げたというのは、そういうことでございます。これは、受けたからには、やはり望

月高校の提案と、野沢南を提案されているので、これを論議するというのが自然な流れだと思っています。

ただ、ひとつ委員長がおっしゃるように、そうはいつでもこの全体像の中で、統合という問題もあるので、その問題も論議しようということであるのであれば、並行してという器用なこともできませんけれども、ひとつ、西村委員のような進め方がいいのかなと、私は思います。

ただし、委員長の発言の中でも、当然この2校が統合するかなのような言い方がございますが、これは少し違うのではないかなと思います。われわれはこのような結論を出したつもりはありませんし、これからそれをどうするのか論議する、こういうことでございますので、結論を急がず、結論を求められているという、立場もよく理解できますが、われわれの論議は近い歴史の中で、必ず評価されるわけなので、それも3年か4年の中で、われわれがまだこの世にいる間に評価されるわけなので、ぜひ真剣な論議をして、県教委の案をそのまま鵜呑みにして、それをどうだという以前に、西村委員のように、もう一度データを見て、論議しなければ大変、失礼になると思っています。

（飯島委員長）

データは先ほど、宮阪委員が、非常に細かく県教委のデータを数字で、表してくれました。あれがすべてであろうと思います。そして、実際に子どもたちが減ってきていることも、これは資料から事実であります。ですから、あえて県教委が出したから、それがまずいということではなくて、データからいくとそうではないかなということであります。まだ、結論を急ぐという形であるならば、頭の隅っこに入れながら討議するというのも、やぶさかではありませんが、どうぞ、結論が早いというならば、それは頭の中に入れながら討議を進めてください。

そして、佐藤委員から、野沢北と南を統合するというと、私の発言を少しお許しいたきますと、統合するのですからひとつの校舎が空きます。それを全然、学校名は別として、多部制・単位制の高校を作り上げるということも、私はふっと思ったわけであります。これは、佐藤委員から出たことからであります。一緒になるならば、その学校の校舎ひとつ空くわけです。結果的に同じことですけれども、過程は違う、そういうこともあります。

そういう中で、今度は、先ほど西村委員から出ましたように、それじゃほかの、臼田高校、それから、北農、岩高はそのままでもいいのかと、ということもぜひお考えいただきたい。充足率、各いろいろな機械科、電子科、電気科というのがありますので、この辺の充足率のことも考えたり、あるいは臼田高校に環境緑地というものがある、これを北佐久農業の方に回しても、同じ農業関係でもいいのではないかと、そういう話が当然出てくるのであらうと思います。

ですから、野沢南を転換ではなくて、合併した空いた校舎を使ってという形があり得るのかなと思いました。これは、私もちょっと意見を言いたかったものですから、委員長の発言という意味ではなく、ひとつの意見として、これからの議論の中に生かしていただければと思います。

(佐藤副委員長)

私も前々からいっていたのですが、この問題に関しては、県教委の説明不足がだいぶあるという気がしています。たとえば、先ほどの統合の問題もそうです。統合というのは、こういう趣旨だということを、口が酸っぱくなるまでやればそれほど危機感もなく、生徒数が少なくなるわけですから、当然受け入れざるを得ないという中で、もっと県教委がしっかりした説明、ここだけは譲れない、こういう方針でやりますということを、もっと説明していただいた方がいい。

それから、先ほどから出ているように、例えば野沢南が多部制・単位制になったときに、240名はどこにいくのだ、こういうことを県教委はきちんとつかんでいると思うのです。例えば、臼田高校でしっかり吸収します。あるいは、先ほど委員長が言われたように、臼田高校はそのためには、職業科を他に持っていく。そういう中での、私は、全体を見回した統合なのだと、一番初めにいったのはそういう意味です。だから私は、県教委がこういうふうに成し遂げるためには、こういうふうを考えているのだと、きちんと説明すれば、240名いったいどこにいつてしまうのだろうと、というような心配は全然ないわけです。「臼田高校をしっかりと、普通高校として確立します。充実します。そのためには職業科を北農に持って行って、北農を充実します。」というようなおそらく全体の流れは、つかんだ上で、案が練られていっているのではないかと、私は思うのです。そういう中で、やはりしっかりそういう説明をしていただければ、無駄ないろいろなことを考えずに、もっとスムーズに進んだのではないかなと思います。特に、統合の問題は、何回もいうように、しっかり県教委が統合というのは、廃校、統合ではない、統合ですということをはっきり打ち出してくれば、なんの不安もなく、新しいものに向かって進める、ということだと思うのです。ですから県教委はそういう説明が、足りないのではないかなと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。統合について、もう一度くどいようですがけれども、事務局より統合の県の考え方、統廃合ではないのだという、今、佐藤委員からの話がありますが、そのようなことも含めましてお願いします。

(吉江高校教育課長)

今、佐藤委員さんのからおっしゃられたこと、私どもはある意味ずっといっていたことだと考えております。A校とB校を統合して、それで、それぞれのいいものを生かした内容の、C校をつくっていくのだというようなことは、かねてより申し上げておまして、それにつきましては、ある意味、一定のご理解をいただいている面もあると思います。

ただ、ご理解をいただきながらも、なかなか結果的には、心情的に正直申し上げて、納得いかないというようなことが、これは、このご当地に限らず、ほかの委員会においても同様な関係があると考えています。

それと、数の関係、先ほど来お話が出ている、例えば240、200名がどうなるかということで申し上げますと、私どもは今までこの候補案自体が、前々から申し上げておりますように、ひとつの案という前提で出しておりますので、ここが変わった場合、ではどうなるのかという議論がどうしても出ます。

例えばの話が、今話題になっている学校の場合であれば、「ここと、ここと、ここを動かします」というようなお話が、場合によってはできるかもしれない。ただ、もしそこが違えばどうなるのかと、というような議論がありますので。ただ、1点申し上げるとすれば、これは、以前もいったことがあろうかとは思いますが、例えば旧第6通学区において、所定の定員というようなものが、卒業者の数の中で必要だとすれば、それはしっかり統合後の姿が見えた学校の中で、いわゆる過不足なくお入りいただくような、定員設定をしていくというようなことは申し上げてまいりまして、これは今も変わっておりません。それによりまして、例えば話が、旧第6通学区において、生徒さんが行き場がなくなるということには、絶対ならないであろうと、もちろんそのような形のイメージはもっております。

ただ、具体的に「この学校を」というようなお話が、ある程度煮詰まった段階で、そうしたならどこに考えるということであれば、いくらでも対応的なものは、お出ししたいと思っております。ただ出せば出すほど、非常に固まった案のような感じを受けてもと、というような考えもございまして、あまりお出ししていないということでございます。仮の議論として考えてみると、というようなお話もあるかと思しますので、その点は、それは事情によるということでご理解いただきたいと思います。

(太田委員)

関連してよろしいでしょうか。

この点は以前もお聞きしたと思いますが、再度確認ということでお聞きしたいのですが、この統合案で望月高校、蓼科高校を特定した一番の判断基準は何であったのか、どこに置いていらっしゃるのか、申し訳ありませんが、私なりに理解できない点もありますので、ご説明いただくようお願いします。

それと、廃合ではなく統合と言うのなら、この2校の統合により、相乗効果をださなくてはならないと考えます。この点について事務局はどのような考え方、方法論をもっていいのか、お聞きしたいのです。それなりのお考えがあってのご提案だと思いますので、ご回答はいただけたらと思っています。

(飯島委員長)

重複になるかと思いますが、県立高校再編整備候補案について、というときに、例えば望月高校と蓼科高校の統合について、生徒数から含めて、先ほどの宮阪委員がこの資料を見てお話をしていただいたと、思うのですが、その中でその理由を説明しております。地理的な状況、それから最後の総括、再編のイメージ、近隣校への影響など、その辺までも含めながら、提案されておりますが、もう一度説明を求めますか。

(太田委員)

もう一度すみません。後から論議していただかなければいけない、ということです。

(飯島委員長)

お手元に資料はお持ちですか。どうぞそれでは、お手元に皆さん資料があると思うのですが、重複になりますが、太田委員が強く要望しておりますから、事務局で説明をしてください。

(柳澤教育主幹)

個別の再編整備候補案についての、詳細の解説につきましては、今、委員長さんがおっしゃったとおり資料をご覧いただければと思いますが、太田委員さんからのお話は、基本的なこと、ということですので、どこの学校とどこの学校をということではなく、この再編にかかわっての、基本的な考え方という視点で、お話し上げたいと思います。

ひとつは、やはり生徒数の減少と、いうことでございます。その中で、学校規模が縮小してしまう。それに伴うそれぞれの学校の、教育活動の活力低下。こういうことが一番の前提にございます。従って、将来にわたって中学校卒業生数の推移というものは、現在生まれている子どもさんの、31年までの数をベースにしながら、基本的なそれぞれの最終報告書の考え方に基づいて、それぞれの地区の学校数というものを、設定をしてお願いをしているということでございます。

従って、今、相乗効果というお話がございましたが、このまま今の89校体制でいくのは、すでに今の学級減をしながら、しのいできているという状況が、ぎりぎりの状況になってきているということだと考えております。そういう中で将来にわたって、どういう長野県のシステム、全体の数でいいのか、こういう議論を最初に検討委員会でいただいていたわけございまして、その考え方に基づいて、今推進委員会の方で、ご検討いただいているということでございます。

(飯島委員長)

よろしいでしょうか。

(太田委員)

ありがとうございました。ただ、今ご説明の、生徒数の減少ということをとらえていらっしゃる。それを、中心にして総合的な判断をしたと、そういうご説明で理解してよろしいでしょうか。そうしますと減少しているのは望月高校ばかりではないわけです。望月高校が一番志願倍率は、低いというデータはありますが、減少している学校はほかにも4校、5校あるわけですので、そういうところについての比較、そういうものがあって、最終的に望月が選ばれたのかどうかなど、その過程を説明いただかないと、ただ、数字だけの一方的な判断で、ひとつの結論が導きだされたというような、そういう誤解を受け易いのではないのでしょうか。

特に、対象候補となっている学校関係者の皆様方は理解できないところもあるかと思えます。当事者の皆様にも理解されるうまい説明書、大義名分書が必要です。われわれにも理解できるようなこれら提案書があれば、このとおりであります、と説得もできるのですが、従来の事務局提案書では不十分と考えます。

民間での投資案件の論議のように、5校くらいの対象校を挙げての比較検討の結果であれ

ば、判断基準が明確になり、説得性ができます。

（飯島委員長）

どうも、また後ろへ戻ってきております。この辺のところは、太田委員申し訳ないのですが、前々から多くの議論を積み重ねてき、しかも、高校再編の候補案のところでは、それぞれの中学の卒業者の数から、何年後にはどうなるのだと、この地域はこうだということを、説明をいただきながら進んできていると思うのです。同じ繰り返しになるような気がするのですが、ご納得いただけませんか。

（太田委員）

いえ。私は、そういう感じは持っておりますので、ほかの委員さんが納得して、これは望月高校と蓼科高校の統合だという結論を、素直に理解されて判断いただくのでしたら、それは構いません。私はあくまでも、そのところは疑問でございます。

（西村委員）

私もあまり、詳しい数字が手元になかったので、ある程度、県からいただいた資料等を参考にして、自分でシミュレーションしてみました。今、太田委員の質問に答えますと、もし再編をしないとすると、平成31年には2クラスの学校が3つになります。なにもしないと。それから、一番多い学校でも5クラスです。大変に厳しいことを言いますが、2クラスの学校は、今の学校でいきますと、蓼科と望月です。もう1校あります。

それから、先般申しましたけれども、32年になるとまた子どもの数が減るのです。県教委は資料を4月につくりましたので、その後を検討してみましよう。これは別の新聞社の記事を見ておりますけれども、一応信用しております。それによると、第6通学区は4クラス減ります。だから、そういう面からすると、望月は大変厳しい環境にあると、私は認識しております。そういう面を踏まえた上で、最終的にはやはり蓼科、望月が一緒になって、佐藤委員からも話があるように、魅力のある学校をつくっていくのが、一番いい方法ではないかなと私は個人的に思っております。

（飯島委員長）

ありがとうございました。そういう根底の上にたって学校減も、ぜひしてほしいということで、非常に難しい選択であります。私たちは議論を進めてきているわけでありまして。とりあえず、望月と蓼科は頭の隅において、私は、佐藤委員の北と南の合併の提案から、いろいろな話をさせていただきましたが、委員長の発言という意味ではなくて、ひとつの議論の参考にとという形で、取り上げていただくなりしていただければと思います。

（荻原委員）

私は、太田委員さんのいうことが大変わかります。10何回もやっていますが、県教委さんに質問するのですけれども、議論はかみ合わないというか、ある一定のスタンス以上には出てこないのです。そこに何が入っているのかはわかりませんが、秘密の箱があるのではないかと、私は思っていますけれども、その議論のかみ合わないところが、私はいら立

ちとなって、不信感が今まであるわけです。

それは前段としまして、先ほど以来、多部制・単位制、南高あるいは、北高と南高が合併したらどうかという、いろいろなお話がございますが、1回だけ私は申したことがございますけれども、臼田高校が、職業科はインテリアと環境とアパレルがあるのですが、これを例えば第6については、総合学科のひとつの候補として、挙げると私はいっておきました。

後は、実際に職業科に関してはどうかというような、再編がありえるのかなと、いうようなことも考えていかないと、今年も、上田では丸子と千曲ですか、商業科が1クラスずつ減の募集になったと思うのですが、そういった意味では、世の中の移ろいもありますけれども、職業科も含めて、やはり多部制・単位制と統合も、見据えてもいいのではないかと思います。

具体的には頭の中にはありませんが、いろいろな資料を、見れば見るほどわからなくなるとというのが、私の実感であります。

一番簡単では、近くで小諸商業には定時制があると。ですから多部制・単位制としては、ちょうど校舎の平米数と敷地面積をみても、南校と同じではないかという部分で、そうすると大変な伝統のある小諸商業に、怒られるわけですが、発想はいろいろできるわけです。感覚的にはいろいろ発想できるわけです。いろいろな数字等はみても、そのくらいの議論といえますが、根拠はありませんけれども、そういう意味では、県教委は南高にこれを行ったと。利便性も含めてやったということでは、もっと奥の手、奥の手というのは悪いですが、もっと説得力のある、そういう部分もあるのではないかと思います。

また、先ほどの課長さんがいわれたように、いろいろなシミュレーションをしていますといいますが、そういった意味では、職業科のある高校について、いじらないという言い方は悪いですが、そのことで、再編はすんだのかなということも含めて、私は職業科も含めて、多部制・単位制を具体的に、議論していかななくてはいけないのではないかと思います。

（飯島委員長）

そのとおりに議論を、進めていきたいと思いますので、どんどん意見を出してください。今、私の方からご紹介するのを忘れましたが、芹澤委員が公務で今日ご欠席であります。その中で、小諸商業という名前が出てきて、芹澤委員がご出席であれば、ご意見が出ようか。と、思われます。その辺、どうぞ校名を出すということであるならば、どうぞお出しただいて、それぞれの意見を出してください。

公開でありますから、非公開にするという話もありますが、公開でやっているわけですから、出していただかないと議論が先に進みません。ですから、皆さんの思いがあるならば出していただく。なければ、やはりたたき台を中心という話になりますから、ぜひお出しください。どうぞ。

(原 委員)

再開後のこの議事の迷走で、私もどういふふう発言していいのかわかっておらず、まとまりのない発言に今回はなるかもしれません。

ひとつ、今、野沢両校の統合であるとか、小商であるとか、別に私は、小商に勤めているから、全然気になさらないでいていただいて結構ですが、ただ、自由な議論の中でそういう名前が出たり、飛び交ったりするのは構わないと思うのですが、この時期に、たたき台に代わる代替案として名前が出るということは、避けた方がいいでしょう。それは、この委員会の文字通り終幕にかかるときにそういうことをすれば、またまた大変な混乱を、学校と地域に及ぼすということになるわけです。

ですから、改めて考えてみると、この委員会はどこまでできるかと、ということになるわけです。私見を申し上げますが、県教委が、たたき台であるとか、目安とか、いろいろな表現を使っていますが、出されています。それについて、いわばそれが妥当かどうか、可とするか否とするかということだろうと思います。それに代わるものを、私たちが責任を持って出せるかどうか。私はこの委員会は、与えられた権限は非常に大きいと思っています。毎回この委員会があるたびに、朝、ないしは午後出てくるのに、気が重くなる部分があるのですが、非常に権限は大きいです。

しかし、率直に言って、私たちこの14人の力量が、それに伴っているのかということも、考えざるを得ません。この東信地域を全域を見渡して、総合学科がどうだ、多部制がどうだとか、学校は、ましてやこれも私は言葉にこだわりますが、統廃合でなくて統合だと今おっしゃられたが、しかし、1たす1が3だとか、AたすBがCになるとかいろいろありますけれども、ひとつの学校がなくなっていく、そのことに私たちは責任をもって解答が出せるのか。そういうことを深く考えざるを得ないです。

今、ふたつの点を申し上げましたが、学校名は自由な議論の中で、飛び交うのもいいでしょうけれども、この時期において対案的なものは、無理ではないかということと、権限に対して私どもの力量の問題について、もう少し考えていった方がいいと思います。

もう一言そのことに付け加えますと、この対案の取り扱いの中で、いまだに発表の機会が与えられていない、野沢南高校の職場分会の意見書の中に、こういうくだりがあります。この対案の中には、具体校名を挙げての対案は出せるものではありません。少し省略しますが、県がたたき台として提示したことに帰して、たとえそれが対案であるとしても、該当校に多大な心痛と周辺中学校に対する迷惑をおかけすることは、身をもって知り尽くしていると。野沢南に勤務されている先生方がこういう意見を出しているわけで、このことは私たちも、本当に謙虚に受け止める必要があると思うのです。

そういう意味で、先ほどの意見の補強をしたいと思うのです。議事があっちにいたり、こっちにいたりすることは、やむを得ないとして、私が先ほど発言を準備していたことについてふれたいと思うのですが、野沢南の転換については、中沢委員さんがおっしゃられていることが、ベースになると思うのです。どういう形の多部制・単位制のさまざまな工夫をして、改善もして、いろいろやっていくにしても、第一に学校の規模の問題です。現在240名による6学級、それが前回の課長さんの答弁でありましたが、基本は1、1、1ないしは2、1、1という、そういう学校規模になる。ましてや、それは現在の240名がそのまま1、1、1、2、1、1に入っていくとは限らない数字なのです。そうすると、240名中

の大半の生徒諸君は、基本的には近隣の学校に行くと、こういうことになるわけです。近隣の学校もさまざまな、改革をする、それも当然でありましょう。しかし、そこは非常に大きなリスクを持っているわけです。単に、高校で収容すればいい。どうやら、このたたき台の発想は、ある学校をなくして、近隣の学校も1年、2年のことではなく、10年余にわたって、学級増をしながら収容するという、発想があるのではないかと思います。

なるほど、これからずいぶん先の平成31年とか32年、生徒が激減すると、そのことは十分配慮しなければいけないけれども、そこだけにターゲットを当てるのではなくて、これから10年くらいの間の、ややなだらかにいく部分にも、目を向ける必要がありますし、そこにおけるリスクということを考えますと、野沢南の転換というのは、非常に問題が多いということになると思います。議論が委員会の権限の問題など、多岐にまたがって恐縮ですが。

（飯島委員長）

私たちの技量がうんぬんという話になると、今後この委員会の推進委員が初めからなくなってしまいますから、その議論はあまりにも、原委員としては僭越な話であります。当時、設置要項をもって、私たちは委嘱されたわけで、その時点で受けているわけですから、それは確かに技量がないでしょうと、いわれればないかもしれません。でも一生懸命やっていることは事実であります。それは、私もそうでしょうし、ほかの委員さん方も、真剣にこうやって休日をつぶして来ているわけです。技量のことをいうのは、あまりにも失礼だと思います。精いっぱいやっているということだけは、お認めいただきたいと思います。

それから、あくまでもこの設置要項にのっとって私たちは、委員を委嘱されたわけです。そして、これを議論して答申、いわゆる報告書を出して下さいよということで動いているわけです。ですから、それはずすことはできないだろうと思います。これはできないというならなぜできないのか、その辺のところを報告書に載せて、報告する義務があるのであると思います。

ですから、確かに私も話があちこちにいつてしまいますが、ここで、校名を出すというのは大変であります。太田委員、あるいは遠山委員もかつて発言されましたが、校名を出すときは非公開でという話もあります。非公開の場所を、例えば1時間なり設けた中で、委員の皆さんも喧々諤々意見を、いただいたものをこの委員会で報告するという手法も、あるかと思います。それは、確かにここで校名を出すとその学校、あるいはこれからそこを受験をしようとする生徒さんたちに、いろいろな大変なご迷惑をおかけしますから、そういう意味で、前向きな形の、非公開ということはあるのかもしれません。そして、その委員会の中で十分議論をしたものに対しては、責任を持ってここで発表するという、方法も考えてもよろしいかなと思います。

これは、野沢南だけの話にとどまらず、今、いろいろな話が出てきておりますから、そういう影響も考えると、いかがなものでしょうか。非公開ということもしてもいいのかなと。そこで議論したことは、当然あとで、責任を持ってきっちり報告をすることはもちろんであります。

（荻原委員）

具体的な校名を出すことは、先ほど原委員がいったように、それぞれ、対案にしても、皆大変なわけです。ただ、対案の中には、どこも具体的な校名は入っていません。それは、わかるのですが、具体的に議論していくには校名は挙げざるをえないと、私の未熟な知識でも、そういう非力な面はあっても、具体的な校名を出さないと、県教委のたたき台以外は出せないということになれば、それはどうにもならないわけです。

そこは、具体的な校名を軽く出すことは、悪いかもしれないけれども、それによって、やはり自分も調べるし、委員の皆さんも考えていただくことは、私はそういった勇気といえますか、いろいろな公的な教育委員会もそういった格好で、具体的なたたき台を出せるけれども、われわれ委員は、あるいは、われわれPTAは、われわれ保護者は、そういった具体的な校名を出せないということで、大変なハンデはあると思います。ですが、それはやはり具体的にやらないと、検討しないと、どうにもならないのではないかと。そういう意味では、具体的な校名を今更出せと言われても、ここに来たから出すということもあると思うのです。そういうことをご理解いただければと思います。

（飯島委員長）

校名を出して、この公開の場で議論を進めていった方がいいのか、あるいは太田委員がいつも言っているように、校名を出すときは非公開でという形の手法をとるのか、この点だけでご意見ください。

（和泉委員）

私は、先ほど委員長がいわれたとおり、一定期間非公開にして、報告すべきことは報告してやってもいいと思います。現実問題として、どこをどういうふうにするかということで、学校名を伏せていえるという話ではないような、もう最後の詰めのところだと思います。当然、具体的にそういうことを、個別で討議し、その内容をチェックし、そして是非非を討議するということは、ひとつの学校を確認していく中では大事なことになるので、それがやはり今の受験生だとか、ご家族だとかいろいろなところに、影響があるのだったら、次回辺りは非公開にしてやるということに私は賛成です。

（市川委員）

今、多部制・単位制の設置の問題と統合の問題とありまして、今は公開、非公開の問題になってきているわけでしょうか。

（飯島委員長）

いろいろな、多部制・単位制、統合の時に具体的な名前が出てきます。そうしますと、これに対して議論をしていくのに、今、原委員から、今この時点で対案としても具体的な校名が出ると議論というより、その学校に大変な迷惑がかかる。それを控えてほしいという意見。片方では、ここまできたら校名を出さないと、議論が進まないという意見がありますから、この委員会では前々から非公開も、あり得るということで進んできております。

その中で今回、校名を出す段階になってきましたから、しかもこの時期、たとえ議論の

中であっても、実際の校名が出た時には、そこへ受験する生徒さん、あるいは在学している生徒さんたちに、迷惑をかけるから、ある程度この委員会の中でまとまるまでは、非公開にしておいて、その内容は報告しようと、いうことであります。ですから、その点で非公開の形でこの委員会を開きたいと思うけれども、それはどうだろうかということです。ですから、公開か非公開でない方がいいか、それをいってもらえばいいです。

（市川委員）

わかりました。統合に関しましては、私意見がひとつありましたが、そういうことでしたら、この委員会自体も、当初は県教委の説明の中で、不足の部分がこの委員会に注目が集まる中で、公開する意味がありまして、広く世の中に、長野県の議論の深まりの中で、重要な役割を持っていくと考えておりまして、公開をしていくことは大変意義があったと思います。日増しに、私の職場でも関心が高まってきております。

しかしながら、この時期になりまして、今原委員の指摘のとおり、進路選択を中学3年生は、実際に迫られておりまして、具体的に非常に議論を傾聴されている方はご存じですが、まだまだ、非常に理解が不十分な状況もございます。原委員のご指摘のとおり、非常に敏感な面があって、校名、具体的なものに関しましては、理解の部分について不十分な状況もありますので、おかしな誤解を生むような傾向もあるかと思っておりますので、きちりとしたものをこの推進委員会に出したものを、また公開していくということが、この時期の中学3年生の立場からいうと、賢明な点もあるかなと思っております。

（原 委員）

私の発言が、非公開につながるのはまずいです。私はこういうことをいっているのです。ほかの委員会でもそうですが、A校だB校だと名前が挙がったりします。それは、もう先ほどもいいましたように、最終盤にかかっているわけです。基本的な流れからいくと、後これから何回もあるわけではないです。そういうところで、あちこち名前が出ていくと、それはいろいろな学校や地域に影響が大きいと。ですから、それについてはできるだけ禁欲的にと。名前を出すなどは先ほどもいってはいないと思います。そういうことです。

それから、残りの回数が少ないですから、仮に1回非公開でやって、それでまとまるという保証は全くないですから、その議論の経過が毎回、毎回わかるように、このままの形態で続けて、そしてその中で私がいったように、抑制的に扱っていただければと思います。今日でしたか、朝、新聞に、ある新聞の取材メモというところにありましたが、途中から長野県に転勤してきた新聞記者が、今度の高校改革の論議について日増しに県民的な関心も高く、地域でも高揚しているということに一種驚いたという記事が載っていました。そういう状況ですから、非公開という形式は避けた方がいいです。

（飯島委員長）

原委員の意見であります。ここは、多数決でしたいと思いますが...

(西村委員)

公開、非公開について、私は今判断に迷っています。状況の中で、ここは非公開にせざるを得ないという局面が出てきたら、その時に決めたらどうですか。ここでもう、公開にするとか非公開にするとかを多数決で決めなくても、状況に応じてどうしても、しなくてはいけないというのが出てくると思うのです。わざわざ多数決までしてというのは、私はどうかなと、思います。

(飯島委員長)

ここまできますと、荻原委員から具体的な高校名が出たり、佐藤委員からも野沢北、南が合併したりという話が、具体的に出てきたりしますから、ここは次回全部でなくても、今日はもう後 15 分ですから時間がありません。これから後皆さんに、よその部屋に移ったり、傍聴の皆さんに出ていただいてというようなことは、時間的に難しいかと思えますから、次回、頭から非公開でして、そして途中で、公開になるということで、今回は全部非公開という意味ではなくて、例えば 1 時間ですむか、2 時間ですむか、その辺、傍聴している方にお待たせしてしまうことがあり得るのかもしれませんが、これはこの時期にきますとしようがないのかなと思っています。今日できれば、本当は一番いいのですが、もしこの後委員会を延ばして、非公開ですするという形ならば、そうしても構わないです。そうすると傍聴の皆さんには、ご迷惑をかけないで、今日の後半の部分だけは非公開で申し訳ないですが、次回の頭に非公開の中での論議の結論は、詳しく説明するという形ができるかと思いますが。

(荻原委員)

私自身は、皆さんのそういう意見を、聞きながら考えているわけです。そうするとこの後、非公開でやることは、自分なりの結論を全部、校名挙げて持ってこいというそういう格好で、ちょっと早急すぎるような気がするのですが。

(飯島委員長)

いえ。この中で、この議論の場所を非公開の形にするだけで、同じように議論を進めてもらえばいいです。その時に、今いったように校名を出しながら、自分の考えをいっていただき、また、ほかの委員さんの意見を聞きながら、また自分が訂正しながら意見を言い合っていただければいいと、そういうことです。具体名を出さないと今後先に進まないというお話です。

(宮阪委員)

もし、非公開にしたとしても、非公開の結論をまた公開するということが必要になるわけです。そうしますと、今の段階で推進委員会として、ほかの学校名を挙げるということは、入試も迫っていますし、非常に混乱を招くと思います。保護者としては反対です。高校の名前を挙げること自体、反対したいと思います。ついでで申し訳ないですが、結論はひとまず議論をして、地域の理解を得られた上で、導入していくと考えるべきだと思うのです。

それから第2通学区の、入学予定者の数というのは、これから数年間は、急には減少にならないというのは、以前にも申し上げましたが、12月14日の新聞報道で、文教委員会で、高校改革プランの検討委員会の委員長を務めた方の意見と、というのが載っていました。14校の削減というのは、5年、10年の長丁場で実施することを考えていたと、述べられていたと伝えています。検討委員会の最終報告書は、5年、10年をかけて実施することで、つくられたと考えていいと思います。

また県教委が平成31年以降、もう一段階の統廃合を予定しているのであれば、今、この段階で地域の合意が得られないまま、無理をして再編を進める必要は、ないのではないのでしょうか。15校プラス1校という数字は、あくまでも目安とし示されたものと思いますが、この数字に縛られる必要があるのでしょうかとも思います。

(小林委員)

非公開にするかという議論ですが、先ほどから野沢南、北とか小商とかいろいろ出てきました。そういう名前が出てくると私の頭の中に、具体的なイメージなり、ああこういうことかということや、通学範囲そのほかというのが出てくるのですが、「抑制的にいって話し合え」というのは、どういうことかわかりません、それが1点。従って具体名を出して、話し合いをした方がより進むのではないかと思います。それで、宮阪委員さんのような結論に当然なるかもしれないし、なったって構わないと思います。それが1点。

それからもう1点は、あとで報告をするといったそれは、録音を起こして全部公開するのか、そうではなくておよその项目的なり結論を提示するという形になるのか。私は後者で十分であって、途中経過を全部出す必要はないと思います。かえって今心配している校名が多く出た方がいいと思います。出たということは、具体的に話し合った、喧々諤々の議論があった、その結果ということで、その時にいくつかの校名が出ますか、それは消去して結論の校名あるいは第2通ではしなかった、結論に達しなかった、それでいいと私は思いますから、非公開の方向で、いいと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。非公開の会議を持つ場合は、当然最後の結論だけを報告するというので、ご理解をしていきたいと思っています。どうしましょう。非公開でというご意見がだいぶ多いようでございます。

その方が、具体的な名前を出して、そして出した途中での校名に関しては、ご迷惑をかけないような形になっていくのであろうと思います。最終的な結論は、責任を持って、この委員会での発表事項ですから、それを真摯(しんし)に受け止めていただくといい形になります。そのような形にしたいと思います。今日、この後するというのは、いささか難しいのではと思うのです。現在3時51分であります。このまま、委員の皆さんが続けるのであれば、事務局にその場所をできるかセットしてもらってやるか、あるいは次回、もうお手元に次回28日のご案内が、いっていると思います。その冒頭から非公開にして、その非公開のところで結論が出た時点で、公開にしていくという形をとるか、どちらかにしたいと思いますが、どうでしょうか。

（荻原委員）

そうすると、この推進委員会の中では、具体的校名は県教委が出したものの、もしくは議論するか、それは私みたいに、いうのはいうのでしょうか、実際的にはあまり出すなと、そういう時期だから出すなというのか、出してはならぬというのか、そうしないと非公開でやっても、公開でやっているから、かえっていろいろなことを聞くのではないかなと思うのですが。

（飯島委員長）

荻原委員、誤解しないでください。非公開になったら、どんどん出していただいて構いません。

（荻原委員）

いや、この場。出すなということですか。

（飯島委員長）

この場では、出さないでほしいという意見が多いわけです。そして、おそらく出ない議論になりがちです。どうでしょうか、ここから具体名を今までと同じように公開でやって校名を出すことができますか。それと同時に、宮阪委員の方から、子を持つ親とすれば、それはちょっと控えてほしいという話もあります。

（佐藤副委員長）

もちろん、ここまでくるとターゲットも絞られているわけです。そういう中で、やはり西村委員さんの、必要な時にはというお話もございましたが、私どもも14回やったわけです。そういう中で、ある程度いろいろな状況というのはインプットされているわけですから、やはりここで1回非公開で、いろいろこういう場合はだめとかいいとかを設けなくて、とにかくやってみるというのが、まず必要ではないでしょうか。あるところまでくると、同じ委員が同じ場所で同じ事をやっても、堂々巡りになってしまうので、場所を変えれば、立場上いえないという人もいるわけだし、縛りがなくなると。そういう意味で、私は1回やってみる。それでこういう場合は、こういうテーマは入れませんというのではなくて、とにかくやってみるということで、結論が出るか出ないかわかりませんが、ある程度共通のベクトルが出るのではないかなという気がします。1回やっていただいて、とそのように思います。同じこういうところで、皆で「う～ん」と考えていても、なかなか先に進みませんので、進めるという意味でどうでしょうか。

（和泉委員）

回数もきましたから、やはり、どこか1回ではやるべきタイミングだと思います。ですから、1回やって、その中で判断すればいいことだと思っています。それが、ひとつと。

ちょっと県のほうにいいですか。今、南校の方に定時制があって、その時の先ほど学校を建てるときは、50億、30億と中学校の場合と高校の場合と。それで、夜間の場合の定時制の場合の、インフラ投資というのは今ここでみると、結構普通高校があって、もちろん

岩高には工業があったり、臼高があったりする。今、私たちが悩んでいるのは、そのインフラというところの投資のところで、そういうふうな判断をしているのですが、定時制に対する、インフラのファクターというのは、どれくらいあるかというのを数字的に、あるいは先生の分でこれだけ増えるのですと、というようなものがあれば、説明していただければ、次回の秘密会議の時にもうちょっと柔軟に、できそうな気がするのです。設備投資というか、さっき給食設備等とよくいわれますが、どのような状況なのでしょう。

（吉江高校教育課長）

基本的には、また資料はご用意いたします。次回はどのような形かはさておきまして、用意しますが、基本的には長野県の場合には、ほとんどの場合全日の校舎を、併用している形をとっています。そういう意味では併設型ですので、あまりかかりません。それから、給食といいましても、最近いわゆる小学校等でいうところの給食というよりは、業者に搬入していただくような形が多いものですから、そういう意味で施設設備が、うんと大きなものが必要という形のものではございません。ただ、当然ながら食堂ですとか、あるいは厨房（ちゅうぼう）的な要素は必要になりますから、そういう意味での利用度は高いということです。それで職員の数等そういったところも含めまして、また今のお話いただきましたものも含めまして、ちょっと次回に用意させていただきます。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございました。それでは、ここであえて決を採るのではなく、委員長の判断で、次回は頭から非公開をしたいと思います。途中で、もし非公開の部分である程度結論が出た時点で公開にして、今後の委員会は、数が少ないですから、無駄のないような形で委員会を進めたいと思います。そういうことで、ご了解をいただきたいと思います。

次回の委員会は、お手元に通知がいつているかと思いますが、もう一度事務局のほうで確認の意味でお願いしたいと思います。

（吉江高校教育課長）

日程につきましては、また後ほどもう一度、担当から申し上げますが、そうしましたら、お決めいただきましたので、次回の会合からどのくらいまでをとりあえず非公開にして、それから先は傍聴の方にお入りいただくようなことに、するような形をとりたいと思いますから、その時間的なものについては、恐縮ですが、よろしければ正、副委員長さんと私どものほうで、相談させていただくというようなことで、ご了解いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

それでは、そのようにさせていただきます。それでは、次回についてよろしくお願いいたします。

（植松主任教育支援主事）

今回の日程でございますが、12月の28日、来週の水曜日の午前を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

お願いいたします。28日9時からということです。年末の本当に迫ったところで大変でしょうけれども。

（原 委員）

その後はどうなりますか。

（植松主任教育支援主事）

その後につきましては、まだ調整中ですので、また至急ご連絡差し上げたいと存じます。

（飯島委員長）

それでは、次回にはもし年が変わって、回数が1度、2度あるならば、きっちり日程を決めて、発表できるようにお願いしたいと思います。それでは、今日は大変、中途半端な委員会になってしまいましたが、次回、非公開をもって、慎重審議で進めたいと思います。

（太田委員）

今日お配りいただいた、知的障害のある生徒への特別支援を考える有志の皆様からの文書は提案なのか、問題提起なのか、どのようなものなのでしょうか。
知的障害のある生徒に高校進学之道を開いていくことは、魅力ある高校づくりという観点からみて大変重要なテーマであると思いますので。

（飯島委員長）

今日の資料の中に入っていた、高等学校改革プランへの要望書であります。これについては、私たちはいただいたものでありますから、今までと同じように、要望が県教委にあったということで、理解すればよろしいですね。そういうことでお願いします。

それでは、終わりにします。ありがとうございました。